



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイヌ語の作意の見えない言語形式
Author(s)	切替, 英雄; Kirikae, Hideo
Citation	北方人文研究, 10, 105-117
Issue Date	2017-03-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65821
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_08_kirikae.pdf



アイヌ語の作意の见えない言語形式*

切替英雄
北海学園大学

医者の使う道具や薬の中にピンセルチンなんてものは存在しないが、あれはたぶん作語症というのだろう。自分独特の言葉を持っているのだよ。これも神人の性格じゃないか。

坂口安吾「神サマを生んだ人々」昭和 28 年

1 反自然的脳と記号

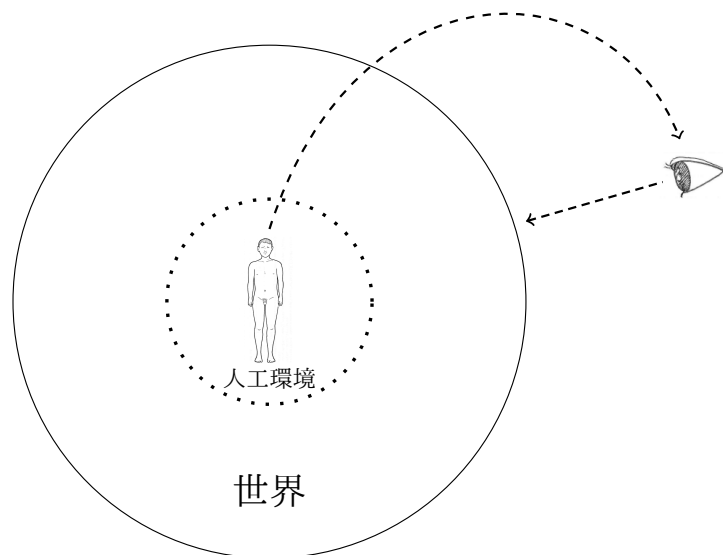


図 1: 反自然的脳の働き

多くの人は「自然」と呼ばれるものを漠然と身体の外のことと思っているようだ。「自然の中に身を置いて」のようなセリフを聞くことがある。その「身」は「自然」ではないのだろうか。少し考えれば、人間の身体そのものも自然であることに気づく。したがって、これもよく耳にする「人間も自然の一部である」という命題は全く正しい。しかしこのような命

この論文は 2016 年 8 月 20 日、北海道大学アイヌ先住民研究センターで「ポイヤウンベの出自をめぐって」と題して話したものの序論に当たるものをまとめたものである。投稿にあたって、中国語学の大谷通順氏（北海学園大学）に草稿を読んでいただき、誤りを数か所直すことができた。また、人名、あだ名、サケへの実例を増やしたら、より説得力のあるものになったろう、との感想を寄せられた。しかし、これにはもはや応えられず、残念に思っている。

題は不毛である。なぜなら、それがいかに正しかろうが、脳の一部の機能は著しく反自然的でそれを認めたがらないからである。ともすれば自然を身体の外のことと思う傾向があるのは、この反自然的脳のなせるわざである。

「自然」と類似した概念に「環境」がある。「自然」には人間が手を付けていない世界という意味合いがある。一方、「環境」という概念では「自然環境」と「人工環境」が区別される。人間以外の生物は定められた自然環境でしか生きていけないが、人間は身の周りに人工環境を作り出し、地球上のあらゆる場所に進出していった。たとえば第4氷期の終わりごろ、ベーリンジアからアメリカ大陸に渡った人類は、瞬く間に（完新世に入る前に）パタゴニアの南端フェゴ島まで到達したという。また、身体の中にも医学的な人工環境を作り、おのれの生存率を高めている。

自然、環境いずれも人間を取り巻いているものである。人間はそこに存在する。そして人間そのものも、その一部である。これを世界と呼ぶことにしよう。しかし初めに述べたように、人間はおのれが世界にすっかり取り込まれその一部と化していると思いたがらない。ショーペンハウアーに「世界とは苦悶しやがて消滅していく者たちの土壇場（刑場）である」という言葉があったと記憶する。このペシミスティックで無神論的な認識を述べたショーペンハウアーは、世界の外に出て世界を見ている。「人間も自然の一部である」と唱える人も自然の外から自然を見ている。環境について論じる人もおのれが環境の一部をなしていることを保留して、外から環境を見ている。世界の一部である人間がどうして世界の外に出られるのか、あるいは出たつもりになれるのか、それどころか、身は滅びるにしても、世界の外に出ているおのれは不滅であると、どうして思い込めるのか、これはアポリアである。

世界の外に出ていると「錯覚」させ、世界に対して超越的立場をとらせる脳の機能を考えるとき、先に述べた反自然的脳の存在を仮定するのが便利である。脳を自然的脳と反自然的脳とに分けて考えてみよう。

自然的脳は身体の外の世界と感覚器官によって通じている。また、身体内部の自然（諸器官）とも通じている。一方、反自然的脳は、世界に対して超越的であるとともに、記号が存在し、かつ記号を生成し操作するところである。なぜなら、世界には記号が存在しないからである。たとえば、交通信号は赤、青、黄色、赤の点滅、黄色の点滅の5つの記号素からなる記号体系であって、これは路上という人工環境にあるものではない。路上にあるのは交通信号機と呼ばれる人工物である。交通信号体系そのものは世界の外に、つまり人間の反自然的脳の中にしかない。交通信号機を交通信号そのものと取り違えるのは、算盤の珠を数そのものとみなすと同じ謬見である。数もまた反自然的脳にある。

人間は記号を操作して考える。数学的思考を深化させるためには数を含む数学記号が必要であって、人間は数学記号を操作して演算する。つまり数学的に考えることが可能になる。また、音符をはじめとする音楽記号があるため、楽曲は異常に複雑で、異常に魅力的なものとなった。これがなければ我々の音楽は素朴な「民族音楽」の段階に留まっていたであろう。言語記号が主として聴覚的であるのに対して数学・音楽記号は主として視覚的である。そうした違いがあるものの、およそ思考とは記号を生成し操作することである。

記号を生成し、操作するという点で、人間はコンピュータと同じである。また、言語を使っておのれの考えを他の人に伝え、他の人の考えたことをおのれの考えに取り入れる。その点でも人間はインターネットに入っているコンピュータと同じである。ちなみに、コンピュータにおのれという意識（自意識）があるかどうか、この問題もまたアポリアである。

2 談話回線と言語記号

作意のない言語形式について考える前提となるソシュールの談話回線 *le circuit de la parole* (de Saussure 1972 [1916] : 27–32) とそこに見いだされた言語記号 *le signe linguistique* (de Saussure 1972 [1916] : 97–100) についての私の理解を示したい。

人間にとって最も価値があり幸福な体験は言語という記号体系を用いず、二人が黙って見つめ合うことだと思う。例えば母の顔を見上げながら無心に乳を吸う幼子とそれをやはり無心に見つめる母のように。この至福の時に言語は不必要となる。ところが不幸なことに人類は言語という記号体系をつくりあげ、それに頼ることになった。この記号体系によって、思考が成立し、かつ複雑なものとなり、同時にそれが他の人に伝えられるようになった。また他の人の思考もこの記号体系を使えば取り入れられ、自己のものとする事ができるから、それが幸せなことなのかどうかはともかく、思考は一層複雑になる。

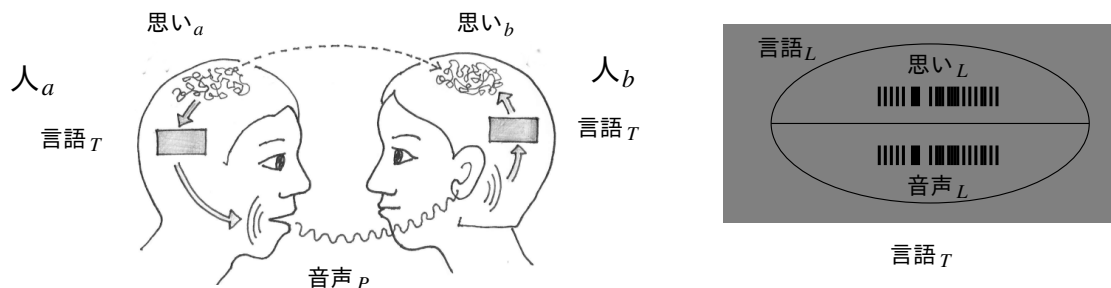


図 2: 談話回線と言語_Lを生成する言語_T

人_aがある思い(思い_a)を抱き、それを人_bに伝えたでしょう(図 2)。思い_aは初めもややとした連続量的 *analog* 状態にある。それには未だ形 *form* が与えられていない(形式化されていない)。それはおよそ思考と言えないものである。人_aはこれを離散的 *digital* なものに変換する。こうして思いは形が整えられ(思い_L)、同時に音声化され(音声_L)、思考が始まる。思い_Lと音声_Lはそれぞれソシュールの *concept*「概念」と *image acoustique*「聴覚映像」に相当する。しかし、ソシュールはすぐにこの二つの用語を捨てて、それぞれ *signifié*「意味されるもの」、*signifiant*「意味するもの」と呼ぶことになった。

形が与えられた音声_Lが音声器官を刺激して現実の音声_Pを作る。ところが、音声_Pは *analog* なものである。なぜなら、音声_Pとは音声器官の動き、空気の振動、鼓膜の振動、内耳液の振動、受容器電位の増減などなどに過ぎないのだから。人_bは、これを再び *digital* 化して(音声_L)、自分の脳髄の中に形が整えられた思い_Lを再現する。続いてこの思い_Lにもとづいて人_bなりのもやもやとした思い_bが作られる。人_bとしては、人_aを誤解しないこと、つまり思い_bは人_bに独自のものではあるけれど、それを当初の思い_aにできる限り近づけること、要するにできるだけ完全な理解、正確な理解を目指すことが肝心である。ソシュールの *langue* は、形式化された思い_Lと音声_Lとの結合、すなわち言語_Lである。*langue* はまた、「記号」、ときによっては「記号列」(記号列もまた記号)とか「言語形式」と言い換えても差し支えなからう。

ソシュールの *langue* には、言語_Lのほかに、もう一つ別の意味合いがある。これを言語_Tと呼ぶことにする。言語_Tは、思いを音声に変換する、また、音声を思いに変換するという

機能を持った、中枢に存在が仮定される装置を指す。言語_Lはこの装置の内部で生成される(図2右図の楕円)。もっとも、ソシユールは、「変換」「生成」に相当する語は用いていない。言語_Tは変換装置といえるけれど、一つの言語共同体の成員に共有されるものである。これを言いかえれば、「日本人(アイヌ)は日本語(アイヌ語)という共通の変換装置を持っている」ということである。

言語_Lは離散的記号の連鎖であるから、人_aと人_bの間で完全にコピーされる(コピー劣化しない)ことが期待される。しかし、変換装置には人により性能に違いがあつて、しばしば期待通りとはならない。悲しむべきことに言語_Lが正確にコピーされず、思い_bが思い_aと著しく隔たることもある。

3 連続量的指示と離散的指示

先に「世界」を円で表したが、記号を考えると、直線で示すと便利である。この直線には、およそこの世で起こった、また起こりうるすべての事象が稠密に散らばっている。言語記号(言語形式)は、この直線で象徴された世界に刻まれた「名前付き目盛り」である。

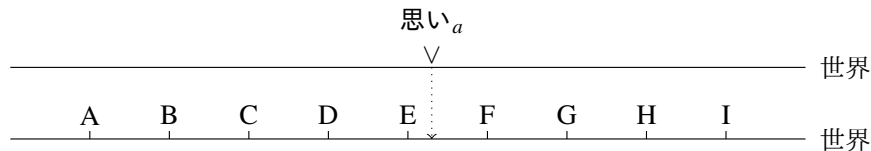
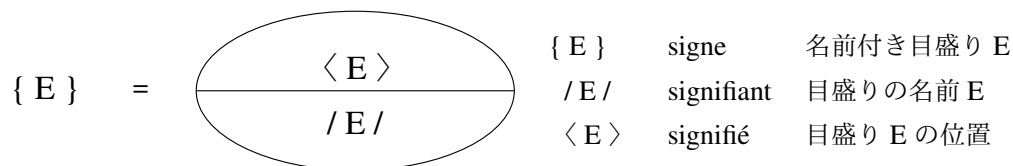


図3: 未分節の世界と分節された世界

図3の2本の直線のうち、上の直線は「名前付き目盛り」の与えられていない世界を表している。この世界は未分節の世界と言われることがある。先の思い_aはこの直線上に存在する(V)。人_aがそれを人_bに伝えようとするとき、この世界には名前付き目盛りがついていないので、人_aとしては、思い_aを指差す他ない。これは的確な指示方法である。この方法を連続量的指示(アナログ指示)と呼ぶ。連続量的指示は的確であるけれど、指先Vを見ている人_bにしか理解されない。また、人_aが指を離してしまえば跡形もなくなるという欠点がある。

図3の下直線は名前付き目盛りが刻まれた世界である(分節された世界)。この名前付き目盛りが言語記号である。



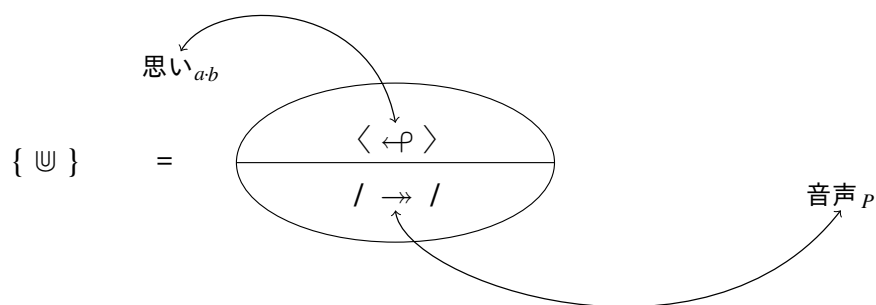
指差し点V(思い_a)とsignifié < E >の不一致は、言語の宿命的欠陥であつて、人_aはそれをもどかしく思う。何を言ったところで「本当はちょっと違うんだけどな」という無念の思いが残る。しかし、人_aとしては思い_aを伝えるためには最も近似する目盛りEを利用するほかない。これが離散的指示(デジタル指示)である。言語_Tによって、より複雑な記号列が生成されるから、名前付き目盛りはもっと細かにできる。しかしどんなに細かに刻んで

も、連続量的指示のようにピタリと決まらない。

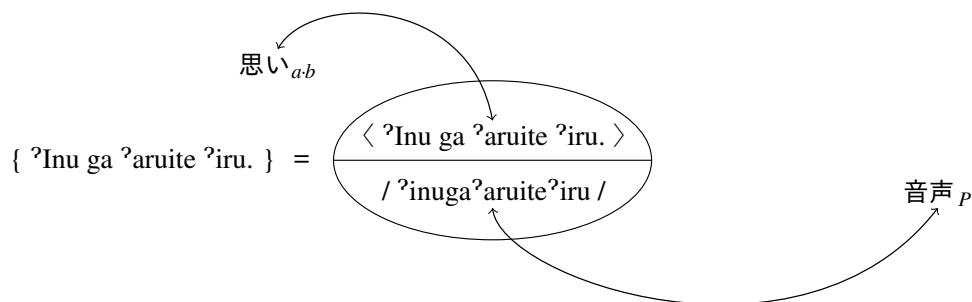
離散的指示は的確性に欠けるが、便利なこともある。{ E }がその場にいない第三者にも伝えられるからである。たとえば私は 2015 年 5 月のある朝、駅への道すがら、通りすがりの若い男女の話を耳にした。娘が青年に「それってちょっとやばいんじゃない」と言った。この言葉が印象に残って、その日の言語学の講義で、「今朝、通勤途中、若い女性が『それってちょっとやばいんじゃない』』というのを聞きました。これってどんな意味なのでしょう。」と 120 名の学生に問いかけて、その意味（娘の思い_a）を皆で考えた。娘が言い、私が聞いた音声（音声_p）が今度は私の音声を通して 120 名の学生の 120 の変換装置（言語_T）にかけられたことになる。{ E }はまず通勤途中の私に伝わり、次いで 120 名の学生に伝わった。つまり娘の思い_a は計り知れないとしても、¹ { E }は公共のものになったのである。一たび口にした言語_L は公共財となり、発信者の手には戻らない。一方、連続量的指示にはこの公共性はなく、その場限りのものである。

4 言語記号とその分節

言語記号{犬が歩いている}を考えてみよう。まず予断を避けるため、この記号を次のように書き表してみよう。



上の示し方ではあんまりだから、もう少し親切に書き換えてみる。



線条性 *linéaire* をなす記号{犬が歩いている}² を時間の軸に沿って切り分けていくと、最初の文{ U }から、文節、語へと細かくなり、最終的には記号素に行きつく。次の図で記号素₁、

¹ そもそも「それって」の「それ」が何を指すかわからないし、また、私は「やばい」に「ものすごくいい」という意味があるのをこの講義で学生に教えてもらうまで知らなかった。

² de Saussure (1972 [1916] : 103) では、言語記号の第二原理として *linéaire du signifiant* について述

記号素₂、記号素₃は等価である。記号素₃はいわゆる表意文字（表語文字）を利用した表記法である。

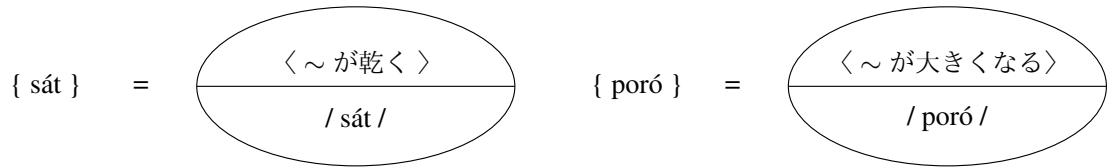
$$\begin{aligned}
 \{ \mathbb{U} \} &= \frac{\langle \leftarrow \rho \rangle}{/ \rightarrow /} = \frac{\langle ?Inu \text{ ga } ?aruite ?iru. \rangle}{/ ?inu \text{ ga } ?aruite ?iru /} \\
 &= \frac{\langle ?inu \text{ ga} \rangle}{/ ?inu \text{ ga} /} + \frac{\langle ?aruite \rangle}{/ ?aruite /} + \frac{\langle ?iru \rangle}{/ ?iru /} \\
 &= \frac{\langle ?inu \rangle}{/ ?inu /} + \frac{\langle \text{ga} \rangle}{/ \text{ga} /} + \frac{\langle ?aruite \rangle}{/ ?aruite /} + \frac{\langle ?iru \rangle}{/ ?iru /} \\
 &= \frac{\langle ?inu \rangle}{/ ?inu /} + \frac{\langle \text{ga} \rangle}{/ \text{ga} /} + \frac{\langle ?aruk \rangle}{/ ?aruk /} + \frac{\langle \text{te} \rangle}{/ \text{te} /} \\
 &+ \frac{\langle ?i \rangle}{/ ?i /} + \frac{\langle \text{ru} \rangle}{/ \text{ru} /} \quad \text{記号素}_1 \\
 &= \{ ?inu \} + \{ \text{ga} \} + \{ ?aruk \} + \{ \text{te} \} + \{ ?i \} + \{ \text{ru} \} \quad \text{記号素}_2 \\
 &= \{ \boxtimes \} + \{ \times \} + \{ \bar{\wedge} \} + \{ \times \} + \{ \leq \} + \{ \gamma \} \quad \text{記号素}_3
 \end{aligned}$$

5 言語記号の恣意性とアイヌ地名の意味

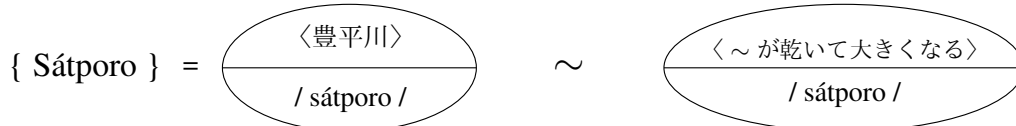
ソシュールの（言語）記号の恣意性 *arbitraire du signe*（de Saussure 1972 [1916] : 100–102）は、例えば{ ?inu }の/ ?inu /と〈 ?inu 〉の関係を用いる。signifiant「意味するもの」と signifié「意味されるもの」の lien「絆」の恣意性は記号素のレベルでのみ認められる。*arbitraire*を「恣意性」と翻訳するのは的確だと思うが、「専制性」と訳してもソシュールの意を汲んだものだと思う。人はあまり問わない、「恣意」とは誰の恣意（気まぐれ、気まま）なのかと。誰の恣意であり、誰による専制なのかといえば、とりあえず、言語の神様の恣意・専制としか言いようがない。人が言語の神様に「なぜ日本語で〈犬〉を/ ?inu /といい、アイヌ語で/ setá /とか/ sitá /というんですか。どうして i を a に置き換えて/ ?anu /ではダメなんですか。あるいはいっそ〈 ?inu 〉を/ neko /と言って、〈 neko 〉を/ ?inu /と言っては、どうしてダメなんですか。アイヌなら s を k に置き換えて、/ ketá /とか/ kitá /と言ってどうしてダメなんですか。」と尋ねると、言語の神様は「うるさい、つべこべぬかすな。オレが決めたんだからおまえらは黙って/ ?inu /と言ってろ。アイヌなら/ setá /と言ってろ、十勝のアイヌなら/ sitá /と言ってろ」と命じるわけだが、これが *arbitraire du signe* である。そのさい、これらの記号を創作した言語の神様の創意（作意）はまるで開示されない。

地名 Sápōro「札幌」は二つの記号素、{ sāt }と{ poró }から構成されている。

べている。私は *linéaire* は *signifié* にもいえると思う。つまり、*langue*、すなわち記号素の連鎖（記号列）が線条性を成すと考えて差し支えないと思う。



しかし { Sátporo } (豊平川の元の名) は先の { ㊦ } と同様に、人間が作った一つの記号である。



{ sát } も { poró } も言語の神様が定めてアイヌに対して専制的に押し付けたものだが、ある「作意」のもと、それらを道具立てとして新たな記号 { Sátporo } を創造したのはアイヌである。

アイヌ語のように、語の合成が非常に盛んな言語では、人間が作った語に 2 つの *signifié* 「意味されるもの」がある。上の左右の楕円はそれを示している。かたや「指示」〈豊平川〉であり、かたや「作意」〈～が乾いて大きくなる〉である。しかしこれは、

〈～は渇水期に乾き、増水期に大河川になる〉

と記すのがより正しい。

アイヌ語の合成語において、指示と作意が並立するのは共時論的現象である。明治 30 年代に生まれたアイヌには合成語の作意が生きていた。ここで言っている作意は、通時論的遡及から分かるという、いわゆる語源ではない。

「地名の意味」とか「由来」と言われるものは、命名者（この場合は人間）の作意、また地名を聞いた人間たちのその了解である。要するに往昔の最初の命名者の作意と、その命名を受け入れた同時代また後代のアイヌの、作意の了解である。その作意を復元する方法については既に「山田秀三のアイヌ語地名研究」(切替 2005) など述べたことがあるのでここでは省略する。

アイヌ地名の意味を究明しようとするなら、まず地名の指示（地名の発生地）を確かめなければならない。{ Sátporo } が現在のどこの何を指したか確かめるのは案外難しい。また 〈～が乾いて大きくなる〉という、作意のごく表面的な解釈を深め、上記の〈～は渇水期に乾き、増水期に大河川になる〉のように季節の推移を読み込んだ具体的な作意を見出すのも昔のアイヌの身にならなければ不可能である (切替 2012a)。

6 人のあだ名の意味

人名のうち、あだ名の作意も地名と同様によく読み取れる。近文のアイヌの婦人、砂沢クラ (1897—1990) の祖父、川村モノクテ Monókhte のあだ名 [?]Óntarose を取り上げよう。

{ [?]Óntarose } は、モノクテを指す。これは指示である。クラによれば、このあだ名は、モノクテが大きな樽を背負ってよろめいたことに由来するという。するとこのあだ名の作意は〈樽しよい〉ということになる。これを構成する記号素は { [?]óntaro } と { sé } である。

あだ名は地名と同様、作意がよく読み取れる。

$$\begin{aligned}
 \{ \text{?} \acute{\text{O}}\text{ntarose} \} &= \frac{\langle \text{砂沢クラの祖父} \rangle}{/ \text{?} \acute{\text{O}}\text{ntarose} /} \sim \frac{\langle \text{樽しよい} \rangle}{/ \text{?} \acute{\text{O}}\text{ntarose} /} \\
 \{ \text{?} \acute{\text{O}}\text{ntaro} \} &= \frac{\langle \text{樽} \rangle}{/ \text{?} \acute{\text{O}}\text{ntaro} /} \quad \{ \text{sé} \} = \frac{\langle \sim \text{が} \sim \text{を背負う} \rangle}{/ \text{sé} /}
 \end{aligned}$$

7 人名の暗号化

祈祷や会見の辞などで用いるという正式の人名は、あだ名のように命名の作意が読み取れない。砂沢クラは、祖父の名モノクテの「意味」（命名者の作意）が分からないという。命名者は一体それをどのようにして付けたのであろうか。

$$\{ \text{Monókte} \} = \frac{\langle \text{砂沢クラの祖父} \rangle}{/ \text{monókte} /} \sim \frac{\langle ? \rangle}{/ \text{monókte} /}$$

私が知る限り、作意が分かっている人名が一つだけある。クラによれば、近文にコソンカという名の男がいたという。この名も正式な名であって、我々には作意が読み取れない。

$$\{ \text{Kosónka} \} = \frac{\langle \text{コソンカと名付けられた男} \rangle}{/ \text{kosónka} /} \sim \frac{\langle ? \rangle}{/ \text{kosónka} /}$$

しかし、クラは作意を知っていた。{ Kosónka }は{ kosónkokus }から作られたという。

$$\{ \text{kosónkokus} \} = \frac{\langle \sim \text{に関して伝令が} \sim \text{を通過する} \rangle}{/ \text{kosónkokus} /}$$

川下の雨竜川（石狩川の支流）の村の女が近文の男に嫁いで来た。ところがその女は月が満ちないうちに男の児を出産した。そこで近文とその村との間にある種のやり取りがあった。それがその男の児の名、コソンカの由来である。

{ kosónkokus }は 〈～に関して伝令が～を通過する〉の意と解される。この記号は { ko- }+{ sónko }+{ kús }と三つの記号素に分節される。それぞれの「意味されるもの」は

〈～に関して〉、〈伝令〉、〈～が～を通過する〉である。この結合が記号{ Kosónka }の作意である。

$$\{ \text{Kosónka} \} = \frac{\langle \sim \text{に関して伝令が} \sim \text{を通過する} \rangle}{/ \text{kosónka} /}$$

これは稀有の例である。クラが命名の経由を伝承していなかったら、上に示す命名者の作意は永遠の謎として留まったであろう。暗号化、つまり *signifiant* の変形がなされたと疑われる。ただし、復号化の方法は知られていないし、なかったのかもしれない。この暗号化により、上の図で示した命名者の作意は完全に隠されている。

$$/ \text{kosónkokus} / \xrightarrow{\text{暗号化}} / \text{kosónka} /$$

するとこういうことが言えないだろうか。{ Monókte }にせよ{ Kosónka }にせよ、その由来はともかく、命名者の作意が見えないから、人間が作った記号のはずが人間が作った記号とは思われなくなる。従って、恣意性を帯びた記号素の資格が発生する。記号素は言語の神様が作意をみせず、訳もなく人間に押し付けたものであった。人名はそれに近づく。

8 ポンヤウンベという名

ここでユーカラのヒーロー、トミサンベツ・シヌタブカの少年英雄の名ポンヤウンベがあだ名であることが明らかになる。

$$\{ \text{Ponyaumbe} \} = \frac{\langle \text{シヌタブカの少年英雄} \rangle}{/ \text{pónyaunpe} /} \sim \frac{\langle \text{アイヌ地のチビ} \rangle}{/ \text{pónyaunpe} /}$$

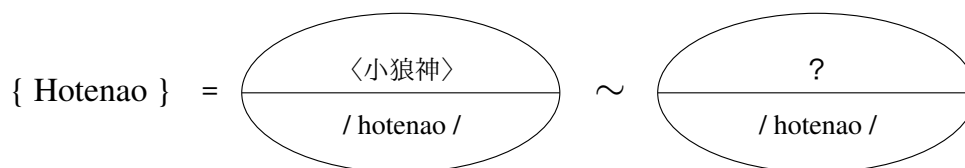
命名の作意が明らかなので「ポンヤウンベ」(Ponyaumbe は金成マツの綴り方)は「幼いアイヌ地に住む者」という意味のあだ名に違いない(pón「～が小さい」、yá「陸」、ún「～が～住む」、pe「者」。この yá はアイヌ地のこと)。しかも、このあだ名は、常に敵対する異郷の異族の者たちが言う。しばしば Ponyaumbe Toiyaumbe「アイヌ地のチビ、アイヌ地の地べた野郎」(toi「土」とも言われる。Ponyaunbe a-ne.「我はポンヤウンベである」などという句はない。ポンヤウンベはオンタロセのように親しみをもって言われるあだ名ではなく、蔑称である。

ポンヤウンベに限らず、蔑称か否かは問わず、ユーカラの登場人物たちはことごとくあだ名でよばれ、かつ自らをあだ名で名乗ることもない。また、正式な名前がわからない。これはアイヌ口承文芸の著しい特徴の一つである。

9 作意が見えない記号 折り返し句（サケヘ）

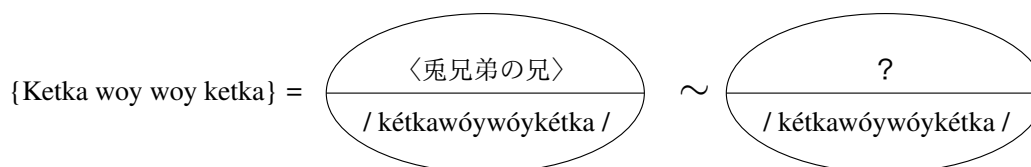
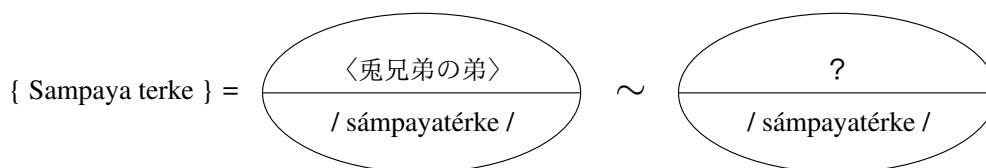
アイヌには言語の神様から授かった語彙にはない、かつ作意の見えない新語を作る著しい趣味があったと思われる。人名がそうであった。サケヘと呼ばれる句もまたそうである。

胆振地方で *kamúy yukar* とか *kamúykar* と呼ばれた口承文芸（金田一京助以来「神謡」と訳されてきた）は、主に動物神が主人公となる小叙事詩であるが、原則として、せいぜい4音節から6音節の各詩句（行）にサケヘ³と呼ばれる意味が取れない短い句が付く。サケヘを「折り返し句」と訳するのが日本のアイヌ語学の伝統である。



いずれの神謡も固有のサケヘを一つ持ち、それが各詩句の末尾で繰り返し歌われる。独特の音響効果を生んだと思われるが、それはそれとして、結局、書籍における柱⁴に相当する機能を持っていたと思われる。つまり、各詩句に判で押したように唱えられるから、それによって今歌われている神謡がどの神謡であるかが分かる。一般にアイヌ口承文芸の諸作品には題名がないが、神謡の場合、これが題名と同じ機能も果たしたと推察される。

上のホテナオは小狼神 *pon horkew kamuy* が語る知里幸恵「アイヌ神謡集」（大正12年）第6話のサケヘである。神謡を含めてアイヌ口承文芸では、一人称で示される「主人公」（わたし）が誰であるかという点に聞き手たちの関心があり、神謡集編者の金田一がしたように、「小狼の神が自ら歌った謡」などと題名を掲げ、鼻から主人公の正体を明かすのは良いことではない。*pon horkew kamuy* というあだ名はこの神謡の最後で言われ、ここで初めて「主人公」（わたし）が誰であるか明かされる。それ故、明かされるまでサケヘの作意は分かってはならない。それどころか、指示も分かってはならない。ホテナオの指示〈小狼神〉は、最後に語り手により *ari pon horkew kamuy isoitak* 「と幼い狼の神様が物語りました」と述べられるまで伏せられている。



³ おそらく *sákehe*。ただし、私はアイヌの口からサケヘという語を直接聞いていない。

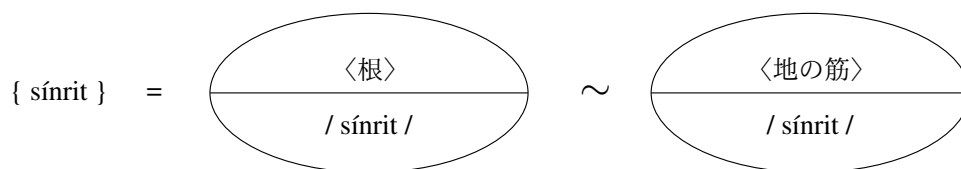
⁴ 和本などでは各丁の中央の折り目に、洋装本では欄外に書名などが刷られたもの。

ところで、「アイヌ神謡集」第4話にはサケヘが二つある。兎の兄弟の弟が語る段の *Sampaya terke* と、それに続いて兄が語る段の *Ketka woy woy ketka ketka woy ketka* である。この二つのサケヘは、二つの段それぞれの「主人公」(わたし)を示す。

サケヘの意味を解こうという試みが知里真志保によってなされたことがある。しかしそれは解けない。むしろ解けないことの意味を考えるべきであった。また、サケヘの指示についての考察もなかった。サケヘは人名と同じように作意不明の句である。確かに上の兎兄弟の弟の段に見られる *terk* は言語の神様が定めた記号素 *térke* 「～が跳ねる」に違いない。このように *signifié* 「意味されるもの」が明らかな記号素がサケヘ内部で用いられることはある。しかし他の要素 (*hotenao*, *sampaya*, *ketka*, *woy* 等) は既存の記号素ではない。従ってサケヘ *Sampaya terke* 全体の作意は読み取れない。指示すらわからない。

10 語の創造と記号素の創造

sínrit という語がある。「(樹木の) 根」という意味を持った普通名詞である。そこから「先祖」とか「素性」という意味が派生している。それはそれとして、この語は *sír* 「地」と *rít* 「筋」という二つの記号素からなる複合語である ($-r + r- \rightarrow -nr-$)。



その「本来の意味」は「地の筋」とでも言えようか。このような「本来の意味」を本稿ではその語の「作意」と呼んだ。一方、語の意味「(樹木の) 根」を「指示」と呼んだ。*sínrit* は、{ *Sátporo* } (札幌) や { *ʔÓntarose* } (モノクテのあだ名) と同様、言語の神様が恣意的かつ専制的に定めて人間に授けた記号、つまり、言語記号の最小単位である二つの記号素を材料として人間が創造した記号である。

アイヌ語は合成語の形成が盛んな言語である。合成とは要するに記号素の組み合わせであり、作意の明らかな、新たな語の創造である。ほとんどのアイヌ地名には *sínrit* 「(樹木の) 根」のように作意が認められる。アイヌ地名は地理的特徴を記述・説明するものであり、狩猟採集生活を行うアイヌにとって合理的で有用な命名であった。たとえば、*Sátporo* ならば、その川に沿って移動すると、ささやかな細流を数多く渡らなければならないところ⁵に至るが、融雪期などではその細流が一本の大河川になり、今の豊平と呼ばれる河岸段丘に逃れる必要がある、ということが分かる。

これに対して、人名とサケヘは記号素の創造である。

人名は、人間が作った記号に違いなく、その指示(名指された当人)は明らかだが、作意が読み取れない。人名は命名の作意を隠すように作られているに違いない。たった一例をもってしてしか言えないけれど、まず作意ある語が作られ(*kosónkokus*)、次に音素と音節が恣意的に(気ままに)組み替えられて *signifiant* (音形式) が攪乱されているように見える(*kosónka*)。これを暗号化と呼んだ。

サケヘも音素と音節が恣意的に組み合わせられている。それは、神謡の同定には役立つ。

⁵ 扇状地。おおよそ今の札幌市中央区。

しかし、作意を不明なものにするとともに、というよりも、そもそも作意などなかったかもしれないが、指示、つまり{ Hotenao }ならその *signifié* 〈小狼神〉さえも隠す機能があった。

11 音変化による作意の不明化

最後に通時論的な音変化により、作意が不明となり、新しい記号素が生まれる事例があることを示したい。

近文のアイヌの間では、火の神が *ʔabéʔuci húci* と呼ばれた(石狩方言)。*ʔabé* 〈火〉、*húci* 〈おばあさん〉。火の神は、どの地方のアイヌにとっても「火のおばあさん」(火の老女神)であるから、*ʔabéʔuci* の *ʔuci* が何だか分からなくなる。おそらく近文のアイヌにも分からなかったと思われる。石狩方言では、アクセントのない音節の *h-* は、*ʔ-* に置き換えられた(ex. *ʔekáci* ← **hekáci* 〈子供〉。一方、*húci* ← **húci*)。⁶ だから、*ʔabéʔuci* は、**ʔabéhuci* であつたろう。これは **ʔabé* と **húci* 合成である。ところが、音変化 *ʔu* ← **hu* により、**ʔabéhuci* から *ʔabéʔuci* という形が生まれた。その結果、*ʔuci* と *húci* 〈おばあさん〉とのつながりが絶たれて、*ʔabéʔuci* の作意が読み取れなくなったに違いない。後の学者も、例えば浅井亨先生も *ʔuci* とは何か、頭を悩まされたようである。この *ʔabéʔuci* に、汎アイヌ的な「火の神」観に従って、*húci* が付加されたのが石狩方言の *ʔabéʔuci húci* であろう。すると *ʔabéʔuci* は音変化によって生まれた〈火〉を意味する新しい記号素ということになる。

参考文献

- 切替英雄(2005)「山田秀三のアイヌ語地名研究」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』11. <http://anrur.la.coocan.jp/otasut.pdf>
- 切替英雄(2012a)「地名真駒内の由来: アイヌ語 *mak* の意味」『北海学園大学学園論集』153. http://anrur.la.coocan.jp/cimei_makomanai_no_yurai.pdf
- 切替英雄(2012b)「アイヌ口承文芸における一人称」『北海学園大学学園論集』153. <http://anrur.la.coocan.jp/iramantehaw.pdf>
- De Saussure, Ferdinand (1972 [1916]) *Cours de linguistique Générale*. Paris: Payot.

⁶ この現象については、十勝方言に基づきより詳しく述べたことがある(切替 2012b)。

Meaningless linguistic form of Ainu

Hideo KIRIKAE

(Hokkai-Gakuen University)

Compounding and derivation are morphological methods very widely and richly used in order to make new words in Ainu. Structures and original meanings of compounds and derivatives, i.e. designs of new words are almost always clear. For example, a common noun *sin-rit* ‘the roots of a tree’ consists of *sir* ‘earth’ and *rit* ‘a sinew’ or ‘a tendom’; a derivative verb *ko-sonko-kus* ‘about *something* messages go back and forth over *somebody*’.

Place-names are designed to be concrete expressions on geography, so they are transparent morphologically. For example, *Sat-poro*, which denotes the Toyohira River flowing through the large fan on which Sapporo City was constructed, means ‘River sometimes becomes narrow, sometimes becomes wide’.

Nicknames of persons are given also descriptively. *Ontaro-se*, the nickname of *Monokte*, an Ainu, means ‘a person bearing a cask’.

However the design of the formal person’s name *Monokte* itself is unclear. Even his granddaughter (1897-1990) did not know its “meaning”. We are not able to find out constituents of this name, though it must be a compound or a derivative originally.

Kosonka, another formal person’s name, is also unclear in its design. According to an informant, the granddaughter of *Monokte*, its original form is *ko-sonko-kus*. It is a miraculous and unique evidence. By the evidence we know that formal persons’ names, of which designs are always unclear, must be cryptograms hiding namers’ designs of naming.

Sakehes ‘refrains’ are also unclear not only in the designs, but also in the denotations. Every pieces of short epic poetry, *kamuykar*, has a proper *sakehe*, which is repeated and recited at the end of each metrical line. Its function is same as headers or footers of a book. It denotes the piece of epic poetry itself or the hero of the epic poetry. But in the Ainu oral tradition the hero is referred to by the affix of the first person. Who is the first person? The natural shape or identity of the hero designated by the first person affix must be concealed till the end of the story. Another function of a *sakehe* seems to hide the natural shape of the hero.